



## ～ 早期出荷を狙うジャガイモの品種比較 ～

ジャガイモは、「島じゃが」として島内で最も親しまれている野菜のひとつです。標準的に作られている品種「男爵」の収穫期は4月以降ですが、来島者が多い3月に出荷可能な品種があれば、販売機会の拡大につながると考え、品種比較試験を実施しました。

堆肥1t/10aを1か月前に投入した圃場で、N:P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>:K<sub>2</sub>O=15:20:18(kg/10a)を基肥とし、条間70cm×株間30cmで12月10日に植えつけました。1月上旬には全品種が発芽しました。3月12日に各区5株×3反復を掘り取り、地上部と収穫物を調査しました。ベニアカリは草丈が低く、ワセシロは枯れ始めていました。芋は目視で8cm以上を上物とし、株当りの個数と重さを調査しました。「キタアカリ」は「男爵」に比べて個数は同じで大玉傾向、「とうや」は同サイ

ズの芋が株当たり約1個多くなりました(表1)。これらは4月まで栽培を継続した「男爵」の平均4.5個515g(データ省略)の収量にほぼ匹敵する数値で、1か月の早掘りでも同等の収量が得られると評価できます。

4月11日に食味調査を実施しました。味付けせず茹でた芋を品種名を伏せて32名で評価しました。外観では「とうや、キタアカリ」が優れ、味は「キタアカリ」が最も高い評価となりました。ホクホク感と皮の柔らかさが好まれ、総合評価でも「キタアカリ」が最も高くなりました(表2)。

表2 ジャガイモの食味に関する官能評価(回答者数\*132名)

評価項目*2	男爵	とうや	キタアカリ	ベニアカリ	ワセシロ
外観(見た目・生)	3.5	4.2	3.9	2.6	3.2
外観(見た目・加熱後)	3.4	3.9	4.1	2.3	3.0
味	3.1	2.7	3.6	2.7	3.2
肉質(ホクホク感)	3.3	3.1	3.8	2.8	3.3
皮(柔らかさ)	3.0	2.8	3.1	3.0	3.4
総合評価*3	3.5	3.1	4.0	2.5	3.3

\*1回答者: 男性69%・女性31%, 20代19%・30代15%・40代47%・50代19%

\*2すべて良5～悪1の5段階評価, 肉質はホクホク・皮は柔らかいを5とした。

\*3各項目の平均値ではなく、回答者それぞれの総合的な官能評価以上より、「キタアカリ」は3月出荷が可能で、食味評価も高く有望な品種です。

<網野>

表1 父島におけるジャガイモの収量特性

	地上部		上物芋		小玉	
	草丈 (cm)	重 (g)	数 (個)	重量 (g)	数 (個)	重量 (g)
男爵	62	233	3.6	392	3.2	61
とうや	69	294	4.5	479	3.3	81
キタアカリ	61	219	3.5	503	3.3	99
ベニアカリ	58	195	3.5	291	4.6	122
ワセシロ	61	144	4.3	422	3.3	98

\*2013年12月10日植えつけ, 3月12日収穫調査

### 農業者セミナー開講のお知らせ

当センターでは今年度も、意欲ある農業者を対象とした農業者セミナーを開講しています。今後の予定は以下のとおりですが、開催時間は前月開催時または「村民便り」でお知らせします。

《10月》「作物の機能性・品質保持」 父島：10月6日(月) 母島：4日(土)  
講師：東京都農林総合研究センター 木幡副参事研究員

《11月》「野菜栽培」 父島：11月16日(日) 母島：14日(金)  
講師：東京都農林総合研究センター 沼尻研究員

参加を希望される方は、農業センター(担当:菅原)までお申込み下さい(TEL2104/FAX2565)

## ～ 平成 26年度土壤診断結果報告(概況) ～

○ 今年度の診断は農業者からの要望で、トマト収穫後(6月)と施設パッション収穫後(7～8月)に試料採取を行う2回実施しました。

診断数は、1回目父島3戸4点、母島12戸41点、2回目父島6戸13点、母島10戸30点、合計父島9戸17点、母島22戸42点でした。

1回目は7月15日付け、2回目は9月1日付けでJAを通じて個別に報告書(処方箋)を配付しました。

○ 今回の診断で気付いた点を、診断結果から解説します。

### <Aの場合>低 pH・低 Ca・低 Mg

小笠原の土壤は低 pH の畑が多いようですので、石灰資材の効果的な利用が不可欠です。酸度矯正と Ca と Mg の補給を兼ねて苦土石灰(アルカリ分55%・Mg15%)を施用が効果的です。

### <Bの場合>低 pH・適 Ca

石灰が十分あるが、土が酸性に傾いている場合には、土中の石灰を利用します。腐植の機能で活性化します。そのため、堆肥を投入して土とよく混和しましょう。

### <Cの場合>低 P・低 Mg・やや低 pH

リン酸と苦土の補給と酸度矯正には熔リ

ン(P20%、Mg 15%、アルカリ分 50%)が有効ですが、この場合も土中の腐植の役割が重要です。

### <Dの場合>高 K・高 Ca・低 Mg

硫酸マグネシウム(Mg25%)を用いて苦土の補給を行うとともに、土中に多く含まれる養分を利用するために、できるだけ多くの土と混和する深耕を行いましょう。

### <Eの場合>低 P・高 K・やや高 pH・やや低 Mg

酸度矯正が必要のない場合は、苦土重焼リン(P35%、Mg15%)が有効です。また、有機物施用も兼ねて米糠(P6%)や魚粕(P7%)の積極的な利用も検討してください。

○ 表1で示したように、各圃場で土壤状態は異なります。また、肥料の使い方も変わってきます。安定した作柄を期待するのであれば、全ての成分の有効利用に影響する腐植の役割が重要です。腐食供給は、良質な堆肥や有機質肥料と、「耕す」ことによる土への酸素供給で可能となります。原点となる「土づくり」を考え、実践しましょう。不明な点は農業センター・営農研にご相談下さい。

<営農研修所・藤本>

表1 土壤診断結果の一例

圃場	pH	EC mS/cm	リン酸 (P)	カリ (K)	石灰カルシウム (Ca)	苦土マグネシウム (Mg)
			mg/100g			
基準	5.5 - 6.5	0.1 - 0.3	20 - 80	50 - 60	250 - 350	50 - 80
A	4.1	0.1	128	110	155	19
B	4.0	0.1	130	113	342	31
C	5.5	0.1	9	71	177	20
D	7.1	0.1	47	170	479	29
E	6.8	0.1	4	240	360	28

※ 施肥基準は小笠原赤色土を参照

## ～ ノヤギ駆除の現状と今後について ～

### 1. これまでの取り組み

小笠原諸島には戦前より人が居住していた島とその属島（聳島列島の聳島、媒島、嫁島、父島列島の父島、兄島、弟島、西島）に家畜としてヤギが生息していましたが、戦争による強制疎開を含み、長年放置された事により野生化した事で、小笠原固有の植物を含む生態系に大きな被害を及ぼしてきました。また媒島では食害による裸地化によって大量の赤土が海へ流出したため、周辺海域の生態系へも影響が出ました。東京都は植生回復事業の一環として平成 9 年より属島での駆除を開始し、平成 22 年には父島以外の属島での駆除を完了しました。

### 2. 父島でのノヤギ駆除事業

父島ではノヤギによる農業被害への対応として、東京都が昭和 51 年より 3 年間駆除事業を実施し、一定の成果があった事から事業を終了しましたが、その後再び生息数が増加に転じ、農業への影響が懸念された事から昭和 63 年より再び駆除事業を再開しました。平成 4 年に東京都から村に事業が引き継がれ現在に至るまで継続して駆除事業を行っています。それまでは主に農業被害対策としてのみ駆除がおこなわれていたため、農地以外での駆除は行われていませんでしたが、平成 22 年度からは生態系保全事業の一環として環境省および東京都が新たに駆除事業を開始しました。これは世界自然遺産登録に伴い小笠原固有の植物の保全を目的とした事業として始まりました。これにより父島全地域での駆除を行うこととなり、今後も村と東京都、環境省が協力しながらノヤギの全

頭駆除を目標に事業を行っています。ノヤギの正確な生息数については算出が困難ですが、世界自然遺産で指定された特別保護地域のヤギ排除柵内では完全駆除は達成され、島北部での生息密度も以前に比べて体感できるほどに低下したと考えられています。今後は島南部を重点区域として引き続き事業を継続していきます。

### 3. これからの取り組み

小笠原でのノヤギ対策は返還後の重要な課題として長年実施されてきました。属島では 14 年間をかけて全頭駆除を行うことができましたが、有人島である父島では駆除を行える地域が限定される事に加え、春、夏の観光シーズンやおがさわら丸入港中は観光事業に配慮して駆除作業を行っていません。また、今後駆除の重点実施区域になる島南部についても急峻な地形条件により効率的な駆除が行えないなど難しい面もありますが、引き続き各行政機関が協力しながら全頭駆除を目指し事業を進めていきます。



<産業課 鳥獣担当：高野>

## ～ 産卵鶏飼養の基礎知識 ～

### 養鶏に関するご質問

本年度、新たに採卵鶏飼養を開始した生産者が数戸いらっしゃいます。鶏飼養は初心者の方でも比較的容易に取り組めますが、何点かご質問を受けましたので小笠原における産卵鶏飼養の基本事項を紹介します。

#### ① ヒナの導入

農協が年1回（例年12月頃）、購入申し込みを受けております。内地での寒さが緩む4月頃にはヒナが発送されます。

#### ② 導入後、いつ頃たまごを産む？

導入されるヒナは生後30日程度です。

一般的には生後150日前後に産卵を開始します。産卵開始直後の卵は小さめですが、徐々に大きくなっていきます。

#### ③ サは何を与える？

初心者の方はヒナの成長や産卵に必要な栄養成分が配合されている鶏用配合飼料を規定量与えるのが無難です。トウモロコシ、大豆かす、カキガラ等を用いて自分で配合することもできますが、栄養バランスにご注意ください。また、鶏は緑餌（りょくじ：雑草や野菜くずなど）も大好物です。

#### ④ 養環境の注意点は？

鶏は暑さに強くありません。適度の日陰、風通しがある環境を確保します。また、新鮮な水が常に飲めるようにしましょう。パッション棚の下に放し飼いも可能ですが、産卵場所や飼料摂取場所となる『母屋』に自ら出入りできるように飼い慣らします。暴風雨も注意が必要です。風雨が吹き込む場所はさけるか、風雨防止対策をしましょう。



烏骨鶏

#### ⑤ たまごは何年も生み続けるの？

適切な飼育環境、十分な栄養が摂取されれば、産卵開始から1年程度は70%以上の産卵率（1羽の鶏が10日で7個以上のたまごを産む）があります。ただし、環境要因に左右されるので、絶対にこれだけ産む！とは言いきれません。また、産卵開始から数か月後をピークに徐々に産卵率は低下します。長期間（数年間）産み続けますが、経済性を考えると更新する必要があります。

#### ⑥ オスと一緒にたまごはどうなる？

性成熟したオスと同居する産卵鶏は交尾後、数週間有精卵を産み続けます。有精卵は殻を見ただけでは判断できません。3週間ほど保温すればふ化してヒヨコが生まれますが、無精卵との栄養価に差はありません。



オス鶏

#### ⑦ 環境対策は大丈夫？

農業をされる方は鶏糞の堆肥利用ができますので、活用してみてください。ただし、こまめに除糞しないと飼料の食べ残しと同様、ハエの発生源となる可能性がありますので、ご注意ください。



メス鶏

#### ⑧ 飼養者の義務は？

鶏の飼育を開始された方は、家畜伝染病予防法に基づく飼養羽数等の定期報告や、飼養衛生管理基準を順守した飼養により、家畜伝染病発生の予防に努める義務が発生します。

以上、基本的な事項を紹介しましたが、何かありましたら遠慮なく畜産指導所までご連絡・ご相談ください。

<畜産指導所：太田>